

北京市都心部および郊外農山村の景観変容

藤 永 豪

FUJINAGA Go

(COE研究員・PD)

はじめに

周知のように、現在、中国は著しい経済成長を続けている。その起因は、故鄧小平中国共産党総書記の指導体制の下、1978年から推し進められてきた改革開放政策にある。鄧小平は「先に豊かになれるものから豊かになれ」という「先富論」を説き、沿岸部を中心に積極的に外国資本を誘致し、その高い技術力と経営システムを国内産業に取り入れようとした。この「社会主義市場経済路線」は、途中、「天安門事件」などの影響もあり、失速しかけたが、その後の江沢民体制、胡錦濤体制においても堅持され、今日のような中国経済の急速な発展をもたらすに至った。

1990年代半ば以降は、さすがに経済成長率が10%を下回ったものの、その後も毎年成長率7～9%を維持している。2004年の国内総生産の成長率も9.5%と高い水準を堅持しており、2008年の北京オリンピックおよび2010年の上海万博に向けて、なおも発展は続いている。ただし、その一方では、多くの産業が集積する沿岸部と開発が遅れている内陸部、あるいは都市と縁辺部の農山村の間において、経済格差が確実に広がっている。

本稿は、このような改革開放政策の正負両面を反映しながら変化を続ける中国の都市と農山村の現状について、首都北京市を事例とし、その景観変化に着目しながら、若干の報告を行うものである。

なお、現地調査は2004年11月19日から12月1日にかけて実施した。

I 改革開放がもたらしたもの

改革開放政策における、いわゆる「社会主義市場経

済」システムの導入は、実質的に個人・集団による自由な経済活動を可能とした。これにより、中国経済は、計画経済の枠組みから離れ、国民の自由な経済活動のもと、大きな発展を遂げることとなった。特に、上海や広州、大連などの沿海地域の大都市では、住民の収入増大と旺盛な消費意欲に支えられて、各種の商業施設や高層マンションなどが次々と建設された。また、道路や地下鉄などの交通インフラの整備も進みつつある。本報告が対象地域とする北京市もその例外ではない。都心部では再開発により近代的なビル群が立ち並び、道路は多くの自家用車で渋滞している。通りはビジネススーツや最新のファッションに身を包んだ人々で溢れ、休日にはショッピングを楽しむ家族や恋人たちを目にする。老若男女を問わず、みな携帯電話を手にしており、人々の生活水準の高さが窺える。

ただし、改革開放政策は、もともとは経済的に立ち遅れた農山村の建て直しを目的としたものであった。すなわち、中国における経済改革は農山村から始まったのであり、最初に市場経済システムが取り入れられたのは都市部ではなかった。中国の農山村では、1970年代に入ると、これまでの人民公社を中心とした集団生産体制が立ち行かなくなり、農業生産が全国的に落ち込んだ。そのため、生産責任制を導入し、個人による農産物の売買を認めたのである。このような経済政策の実行によって、都市近郊の農村では、副業として有機野菜の栽培や養殖業を営み、収入を増大させた農家も現れた。さらに、中国政府は農山村の余剰資金・労働力を利用して工業化を促進し、疲弊した農山村経済の発展を目指した（上野編 1993：1-15）。その中で「郷鎮企業」と称される農民主体の企業が生まれ、農村経済発展の重要な牽引役を果たすこととなった。郷鎮企業の中には、海外の企業との提携によって、高

度な技術力を身につけ、国際競争力を高めたり、近年の都市再開発ブームの波に乗り、飛躍的な成長を遂げたものも少なくない。この郷鎮企業の成功によって、「万元戸」と呼ばれる裕福な農家が登場し、耕作地の中に鉄筋コンクリート製の立派な家屋が立ち並ぶ「億元郷」も見られるようになった。このようにして、中国の農山村は着実にその経済力を高め、農民の生活水準は一気に向上した。

しかしながら、農山村に居住するすべての人々が、

前述のような改革開放政策の恩恵を受けているわけではない。都市から遠く離れた地域では、未だ貧困に喘ぐ農山村も多く、この経済格差は政治的・社会的な問題となっている。この中には、農村から都市への違法な大量の人口流入、いわゆる「盲流」現象や「黒孩子」と呼ばれる戸籍を持たない子どもたちの問題も含まれている。また、近年では、都市への出稼ぎ者が急増し、彼らの生活環境やもとの都市住民との対立など、新たな問題も生じ始めている。



図1 北京市の概要
 城区は東城区、西城区、崇文区、宣武区を指す。
 図中の番号は本稿で扱う事例地区を示す。
 (鄭翊光主編 (1988) および中国地図出版社地図開発室編 (2005) をもとに作成)

現在、オリンピック開催に向けた開発ブームに沸く北京市においても同様の問題が存在する。そして、北京市の都市と農山村の景観には、これらの問題を含めた中国政府の政治路線転換の影響と近代化の中で変化する人々の意識と生活が如実に映し出されている。

II 北京市の概要

図1に北京市の概要と本稿で報告する事例地域を示した。北京市は華北平原の北端に位置し、ほぼ全域を河北省に取り囲まれている。面積は16,808km²で、その60%以上が山間地域であり、残りの40%弱が平野となっている。2003年現在、人口1,148.8万、世帯数は427.6万戸⁽¹⁾である。

市の中心は旧北京城の内部である。この旧北京城は、明から清代にかけて建設されたものであるが、現在では、城壁は取り壊され、その上を環状道路の二環路が通っている。その外側を同じく環状道路の三環路、四環路が取り囲み、さらに郊外を高速道路の五環路が走っている。北京の経済成長にともない、住宅開発が盛んに行われ、市街地は五環路周辺まで拡大しつつある。この他にも複数の高速道路が三、四環路を起点に放射状に伸び、北京市と周辺都市を結んでいる。これらの高速道路沿線には、交通の利便性から工業団地や住宅団地が多数立地している。また、オリンピック開催に向けて、環境保全を重視した新たな都市計画が策定され、北京市はさらなる発展を遂げつつある(葉 2005: 35-37)。

以下、このような北京市の変容と現状について、事例地域の景観をもとに考察していく。

III 北京市の景観とその変化

1 都心部(旧城内)の景観変化

(1) 開発の進む商業地区

写真1は①西単のデパートである。西単は故宮の西側に位置する商業地区であり、その起源は元代にまで遡る(図2)。現代でも写真に示すような大型商業施設が複数立地し、前門や王府井とならび、北京市内で最も高次の商業機能を有する。その発展の要因は交通



写真1 西単のデパート (2004年11月筆者撮影)

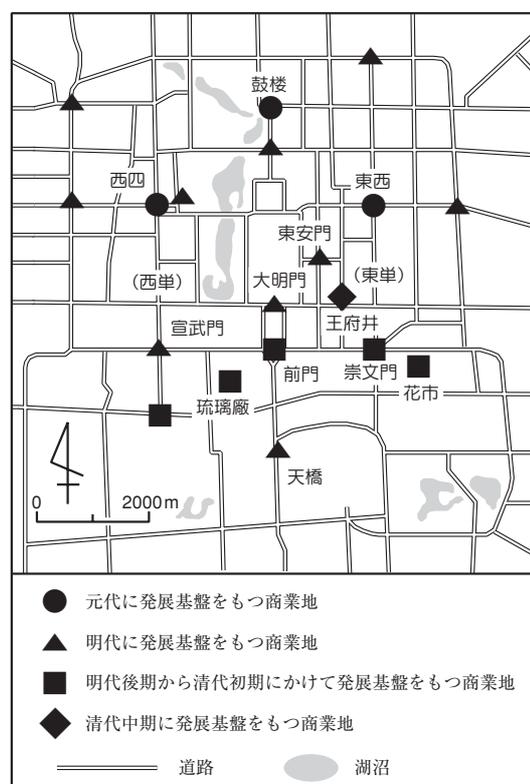


図2 城区内における商業中心地とその発展基盤成立時期 (山崎(1988:42)を引用・加筆)

の利便性に加え、多くの金融機関が隣接して立地しているためである(楊 1993: 23)(写真2)。きらびやかなネオンや広告、若者で混み合う雑踏の様子は、北京の急成長ぶりが窺える景観である。

続いて写真3は②前門付近の商店街の様子である。西単と比べて、小規模な商店が多く、いわゆる「庶民の街」といった景観を呈す。老舗店も多く見られる。ただし、一方で、前門には外資系のコンビニエンスストアやファーストフード店が相次いで進出しており、



写真2 西单そばの中国人民銀行 (2004年11月筆者撮影)



写真5 伝統的な雰囲気醸し出す琉璃廠の街並み (2004年11月筆者撮影)



写真3 前門付近の商店街 (2004年11月筆者撮影)



写真6 人々が憩う胡同 (2004年11月筆者撮影)



写真4 前門に立地する日系のコンビニエンスストア (2004年11月筆者撮影)
このほかにも中国資本のコンビニエンスストアも数多く立地している。

新旧の景観が入り混じった商業地区となっている(写真4)。

西单や前門のように近代的な景観へと変貌する商業地区がある一方で、伝統的な街並みの景観を活かした商業地区も見られる。その一つが筆、硯、墨などの書画に関する美術品や骨董品、書籍などを販売する商店

が集まる琉璃廠である(写真5)。ここは、近年、清代の街並みを復元した商業地区であり、その伝統的な街路の雰囲気も手伝って、旅行誌でもよく取り上げられる観光地である。ただし、もともと存在しなかった門などの建築物を設置するなど、観光用に新しく作り出した景観もその構成要素となっている。

(2) 伝統的建築物と再開発

再開発の進む北京ではあるが、他方では、「胡同」という伝統的な街並み景観を残す地区もある。この胡同は、中国に広く見られる「四合院」と呼ばれる住宅が集まることで形成されている。四合院は中庭を中心に東西南北に平屋の「房」と称される棟がそれぞれ建てられ、入り口は南東もしくは南側に1箇所だけ設けられている。そのため、門を閉めれば、外界との接触は一切ない閉鎖的な空間となっている。したがって、四合院が集まる地区の街路は、すべて壁によって形成されており、この路地を胡同という(竹内 1992: 298)。写真6は④北海付近の胡同の様子である。老人たちが

路地にいすを持ち出しているが、胡同は住民たちの談笑の場であり、重要なコミュニケーション空間であった。現在では四合院の老朽化が進んでおり（写真7）、市政府によって改修や修復工事が進められている（岩井 1992：97-98）。工事は景観を損なわぬよう条例に基づき行われているが、開発の中で取り壊される四合院や胡同も多い（写真8）。

写真9は⑤西城区徳勝門付近から望む開発の様子である。近代的な高架道の向こうにマンションが見える。その間は空き地となっている。かつては土レンガで造られた四合院と細い路地、そこで遊ぶ子どもたち、世間話に夢中になる母親、そんな生活風景が見られたはずである。今は取り壊しを待つ古ぼけた民家が数軒残るだけである。ちなみに写真10は⑥朝陽区におけるビル建設の現場である。おそらく、前述の西城区の開発地区はそれほどの日数を要せず、このような近代的なビル群へと変貌していくものと思われる。これらスク

ラップアンドビルドによる大規模な破壊と創造の景観が今の北京を象徴している。

2 近郊農村の景観変化

(1) 進む住宅開発

写真11は五環路の北側の⑦海淀区西三旗付近の様子である。中国では1980年代から1990年代にかけて、住宅制度が徐々に改正され、公有賃貸住宅の払い下げや民間企業および個人による住宅の建設、販売、購入が認められるようになった。あわせて住宅ローン等に関する法律も整備された。1992年には土地所有権の譲渡が認可され、1998年には住宅の現物支給が廃止された。すなわち、北京市民は自由に不動産売買ができるようになり、また自由に居住地を選択できるようになったのである。開発地区の住民は建設された住宅を優先的に安い価格で購入でき、転居する場合は補助金が支給されるようになった。その結果、近郊の農村地帯は写



写真7 清代に建てられたと推察される四合院
(2004年11月筆者撮影)



写真9 西城区徳勝門付近における再開発の様子
(2004年11月筆者撮影)



写真8 四合院の取り壊し跡地
(2004年11月筆者撮影)



写真10 二環路沿線のビル建設現場
(2004年11月筆者撮影)

真にみられるようなマンションや戸建ての住宅群へと変化した。現在、北京では都心部も含めてオリンピックを見越した投資が過熱化し、不動産価格の高騰を招いている。

(2) オリンピックと緑化事業

このような住宅開発が盛んになる一方で、オリンピックへ向けての緑化事業が進められ、植林のために廃村となった農村も多数存在する。北京市は過去、オリンピック誘致に失敗しているが、その要因の一つが環境問題であった。中国の経済成長は同時に公害という負の面を浮き彫りにし、北京市も大気汚染等の問題を抱えていた。そこで、環境に配慮したオリンピック開催都市の実現を目標とした「緑色五輪（グリーンオリンピック）」をスローガンの一つに掲げた。この緑色五輪計画によれば、2007年までに北京市の緑地面積率を50%にまで引き上げるといふ。現在、都心部では、公園を含めた緑地整備が進められているが、⑧近郊の五環路沿線（朝陽区）では、写真12のように集落と耕



写真11 同規格の住宅群が広がる城区近郊 (2004年11月筆者撮影)



写真12 植林が進む耕作地 (2004年11月筆者撮影)

地を次々と潰して植林し、グリーンベルト地帯を造成しようとしている。オリンピックの選手村や各種の競技施設はこの中に建設される予定である。この景観から中国政府のオリンピックに対する強い意志と強大な権力を読み取ることができる。

3 遠郊農山村の景観変容

(1) 環境保全政策と廃村

北京市の環境問題はオリンピック誘致運動の前後に始まったものではなく、改革開放以前から深刻な状況にあった。特に大気汚染は大きな問題であった。工場や各家庭で燃料として使用される石炭がその主な原因である。近年では急増した自動車の排気ガスも大気汚染に拍車をかけている。また、乾燥した内陸西北部の荒廃地から砂塵が吹き込み、北京名物の冬の砂嵐を引き起こしている。そんな中、オリンピック誘致は環境問題を考え、対策を本格化させる一つの契機となった。北京市は石炭採掘の見直しと工場の移転を決定し、石炭に代わって天然ガスなどのクリーンエネルギーの使用を促進させ、煤煙や有害物質の排出抑制を図った。加えて砂嵐防止のために遠郊の農山村でも植林事業を強化した。当然、このような環境保全政策は農山村に多大な影響を及ぼした。中でも、明・清の時代から北京中心部への石炭の供給地として栄えていた門頭溝区⁽³⁾の山村は、その姿を大きく変えることになった。一部を残して多くの炭鉱が廃鉱となり、耕地には樹木が植えられた。そのため、石炭採掘と農業によって成り立っていた集落の中には廃村・移転したものもある。写真13は廃村となった⑨旧北嶺郷の村々の1つ、旧王平



写真13 廃墟と化した旧王平口村 (2004年11月筆者撮影)

口村である。同村は河北省に通じる街道に位置し、その歴史は清代まで遡る。写真の中の廃墟はその清代に建てられた住居である。旧王平口村を含めて北嶺郷にはおよそ15の村があったが、約3,000人の住民は門頭溝区中心部に造成された⑩新村に全員移住した（写真14）。村民のほとんどが出稼ぎなど農外就業によって収入を得ている。現在、旧北嶺郷には植林事業を施行、監理する営林署の職員が駐留するのみである。

ただし、調査の際、廃墟の中に補修したとみられる家屋を幾つか発見した（写真15）。そこには不法滞在者が住んでいた。彼らはさらに奥地の貧しい山村からわずかに残された炭鉱で働くために、あるいは隠れて第二子、第三子を産むために移住してきた人々である。実際、村の中では、遊びまわると子どもたちの姿が見られた。すなわち、これら山間の村の景観には、前述した「盲流」や「黒孩子」など、現在の中国が抱える問題が凝縮されているのである。

このように、門頭溝区をはじめとする北京市遠郊の

農山村では環境保全を目的とした緑化事業によって廃村が相次ぎ、様々な問題が生じている。もともと改革開放政策は農山村の余剰労働力問題を解消し、農山村経済の活性化を図ったものであった。そのため、農業に従事できなくなった住民の雇用確保は政府にとっても重要な政策的課題である。出稼ぎ労働者の増加が社



写真16 廃村となった旧万佛堂村 (2004年11月筆者撮影)



写真14 長屋のような住宅が並ぶ新北嶺郷 (2004年11月筆者撮影)



写真17 旧万佛堂村で進むスキー場の建設 (2004年11月筆者撮影)



写真15 廃村の中の補修された家屋 (2004年11月筆者撮影)



写真18 スキー場の建設現場脇に掲げられた広告 (2004年11月筆者撮影)

会問題と化している現在、地元での雇用確保が強く望まれている。その1例を紹介する。写真16は門頭溝区中心部に程近い⑪旧万佛堂村である。村の起源は明代にまで遡るが、ここも緑化事業のために廃村となった。住民は先ほど述べた新北嶺郷に隣接した新村に移住したが、若者の多くが出稼ぎ者として流出し、前述の西単や前門、王府井のような北京中心部の商業地区や写真10で示したような建設現場で働いている。そこで、旧万佛堂村の住民たちは地元での雇用創出のために、北京市政府に陳情し、スキー場の建設を行うことにした。廃村となった旧村の麓に宿泊施設を完備したリゾート施設が建設中である（写真17、18）。環境保全という大義に基づく強制的な立ち退きとその補償、日本とは異なる要因があるとはしても、彼らが求めるものは何なのか、これらの景観は我々日本人にとっても切実な問題を突きつけてくる。

（2）観光業の発展

北嶺郷や万佛堂村のような事例がある一方で、観光業によって成功した村も存在する。北京市では1990年以降、「伝統」を付加価値とした農山村における観光開発、すなわち「民俗観光」を推し進めてきた。2003年には北京市観光局が35の「民俗観光村」を認定し、「北京市民俗観光接待戸」なる宿泊業を認可された農家が出現した（王・付 2004：169）。この政策的背景には、自立した農家経営の確立を目指すという目的があった。都心部の住民の収入が増大し、余暇時間を過ごすだけの経済的、時間的余裕を持つようになり、民俗観光業は急速な発展を遂げた。その代表的な事例が、



写真19 川底下村遠景 (2004年11月筆者撮影)
集落背後の山に耕作地の筋が見える。その筋は山頂付近まで続く。

⑫門頭溝区川底下村である（写真19）。同村は北京市中心部から90kmほど西の標高650～700m付近の山間に立地する。2004年11月現在、戸数30、人口およそ70である。

かつての川底下村は、農業を主体とする貧しい山村であった。主な農作物はとうもろこしであり、耕地は集落周辺の山を切り開いて作られ、場所によっては山頂付近にまで分布する。水源は天水が主であり、天候に左右された。しかし、現在では川底下村は観光地として成功し、北京市の中でも豊かな農村の1つとなっている。同村には、四合院を中心とするおよそ400年前の明・清代に建てられたという民家が残され（写真20）、テレビ放映によって注目を浴びたこともあり、1990年代後半から、大幅に観光客が増加した。国内外を問わず多くの観光客が訪れる。川底下村には旅行管理局が組織されている。道路は石畳風に舗装され、駐車場も整備されていた。各四合院は石畳の細道で結ば



写真20 川底下村の四合院 (2004年11月筆者撮影)



写真21 川底下村の民俗観光接待戸 (2004年11月筆者撮影)
農家をそのまま宿泊施設として利用している。民俗観光接待戸に指定された農家の入口には、写真左下のような表示版が掲げられている。

れ、壁面には清代に描かれた絵や文字が残っていた。

聞き取りによると、川底下村には年間8～9万人の観光客が訪れ、海外からは日本人の旅行者が最も多いという。村全体での民俗観光接待戸による収容可能客数は400人を超える（写真21）。農家の収入は1995年の500元から、2003年には40倍の2万元に増加した。中国の農村では珍しく水道が整備され、その豊かさが窺えた（写真22）。各戸にはプロパンガスも普及している。筆者が宿泊した農家には三台のカラーテレビがあり、電気洗濯機などの家電製品も充実していた。

その一方で、農業は副次的なものとなり、作付けを行っていない耕地が増えた。山林も1980年代末から環境保全のために木材の伐採が禁止された。ある農家の主人は「もはや土地（山と耕地）には価値がない」とまでいっていた。彼らの農業に対する意識は薄れつつある。中には村外から転入し、観光業を営む者や耕地を所有しない農家さえみられた。経済活動としての観光業とその枠組みの中に取り込まれ変質する「伝統」という価値、日本の観光地の問題とも重なる事例である。

この川底下村の成功にならって、これから観光に取り組もうとしている村も存在する。写真23の⑬霊水村は、現在、観光地としてアピールすべく、宣伝活動を始めている。北京市観光局にも民俗観光村として指定するよう働きかけを行っている。ただし、現在は補助

金等の支援がないため、町並みや道路の補修、保全は行われていない。表土がむき出しとなった、凹凸の激しい細い道が集落の中を走り、家々は清代からの姿を残したままである（写真24）。中には崩壊しつつある家屋もあり、川底下村とは、ある意味、対照的な景観である。しかしながら、今後、補助金が入り、観光開発が進めば、おそらく、川底下村と同じような景観が作り出されると考えられる。

ちなみに、写真25は霊水村の中を流れる川の様子である。その川底は住民の廃棄したごみで溢れていた。このような光景は、今回の調査で回った農山村の多くで見られた。この写真は、急速な経済発展の中で住民の生活水準は向上したが、一方では、廃棄物の処理が追いつかないことや、住民の環境に対する意識がまだまだ低いことを示している。

（3）郷鎮企業の成功

2003年現在、北京市内には15万8777の郷鎮企業が立地している⁽⁴⁾。その中で、近年、最も注目されたのが、



写真22 水道が完備された川底下村の農家の台所
(2004年11月筆者撮影)



写真23 霊水村
(2004年11月筆者撮影)



写真24 霊水村集落内部の様子
(2004年11月筆者撮影)



写真25 ゴミが散乱する川 (2004年11月筆者撮影)
 改革開放以前の各家庭から排出されるごみは、主に残飯などの自然分解可能な有機物であった。しかし、現在では塩化ビニール製の袋や容器などが増加し、それらをそのまま昔の生活感覚で放棄するため、川底にゴミが溜まるようになった。

韓建集団という建築関連の郷鎮企業を立ち上げ大成功を収めた⑭房山区韓村河村である。

韓建集団の元は田雄志（現在の社長および村の党書記）なる人物が作った30人ほどの技術者集団で、各地の建築現場を渡り歩いていた。その後、改革開放の中で都市の再開発ブームに乗り、ここ20年ほどでまたたく間に20以上の関連会社をまとめる大村有企業へと成長したのである。

その韓村河村は北京市の南西、およそ40kmのところに位置する。その景観はおよそこれまでの中国の農村とは異なる。中心部は舗装された道路によって整然と区画され、西洋・中華風の鉄筋コンクリート製の二階建ての住宅が建ち並び（写真26）、その脇にはこれまた洒落たマンションが幾棟も林立している（写真27）。道路には奇抜なデザインの街灯が設置されている。広



写真26 近代的な韓村河村の住宅群 (2004年11月筆者撮影)

大な公園も造られ、そこにはボートが浮かぶ人工池がある（写真28）。実物の戦車や飛行機までもが置かれていたりする。戸建て（約240～360㎡）の住宅群は村が建設した村民専用のもので、外部資本が販売目的に造成したものではない。マンション（約70～160㎡）は韓建集団の不動産部門が、都心に住む裕福な市民や引退者向けに1㎡あたり約2,500円で販売している。ほぼ完売状態にあるという。この他にも、村民専用の温水プールなど各種の娯楽施設まで完備している。かつてのごくありふれた農村だった頃の面影は一切残っていない（写真29）。

村民の生活は一変した。同村の資料館には、村民全員の以前と現在の住居、家族写真をまとめたパネルが誇らしげに展示されている（写真30）。電気や水道、ガスなどのライフラインが整備され、各家には大型テレビや冷蔵庫など各種の家電製品が普及している。自家用車を持つ家も多い。周辺の農村では「嫁に行くなら韓村河の男性のところ」といわれるほど憧憬の念



写真27 韓村河村で売り出し中のマンション (2004年11月筆者撮影)



写真28 村民のために建設された人工池 (2004年11月筆者撮影)



写真29 かつての韓村河村の様子 (韓村河村資料を接写)



写真30 資料館に展示してある村民のパネル (2004年11月筆者撮影)
上段が家族、中段が現在の住居、下段が以前の住居

をもってみられている。また、全国からはもちろん、江沢民前国家主席など政府の主だった幹部らも次々に視察に訪れている。韓村河村は改革開放における一つの象徴的存在となっている。

IV 景観の中にもみる北京

以上、北京市中心部と郊外の幾つかの農山村について述べてきた。都心部は再開発とインフラ整備が進み、その景観を大きく変えた。少なくとも街を行きかう人々の様子は日本をはじめとする先進諸国と大差はない。そして、この現在の北京の景観を造り出している建設現場では、周辺の農山村から現金収入を求めてやって来た大量の出稼ぎ者が働き、建築資材は郷鎮企業

から供給されている。

その農山村も改革開放の下で、急激な変化を起している。マンションへと姿を変えた村、都市計画や環境政策によって廃村・移転が実行された村、観光開発に成功した村、郷鎮企業の成功によって集落全体が近代的な建築群へと変化した村など様々である。

このような都市と農山村における景観の変化は決して無縁ではない。社会主義国家成立から改革開放以前までの中国における都市と農山村の関係は、極端に述べれば、食料の生産・供給と消費という単純な構造であり(藤永 1995)、日常生活レベルでの相互作用は小さなものであった。しかし、現在では、都市の景観を作り出すのは農山村の人々であり、彼らは都市から得た収入を持って故郷へ戻り、家建て直し、都市の流行を持ち込み、生活様式を変えることで新たな村の景観を創り出していく。両者は密接に結びつき、互いに作用しながら北京全体の景観を形作っている。

このような北京の変容の背後には、改革開放にともなう都市住民と農民、ひいては中国国民の豊かさへの憧れとあくなき欲求がある。もちろん、環境保全政策やオリンピックへ向けた都市計画の推進など中国政府の強大な権力も影響している。さらに盲流や黒孩子など日本とは異なる独自の問題が内在している。このような国家の介入と許容の狭間で揺れ動きながら、新たな問題を抱えつつ、中国国民は自身の欲求を満たすべく激しく動いているのだ。そうした彼らの意識と活動が、今回紹介したような様々な北京の景観を生み出したといえる。

その一方で、都心部では四合院や胡同などの伝統的な建築物や路地裏の風景、いわゆる「老北京」の景観は確実に姿を消しつつある。農山村でもこれまで培われてきた地域の独自性や文化の消失も招きつつある。それが良いか悪いかの判断は別として、日常生活の近代化に反比例して伝統性が希薄化していく。これもまた、景観が語る北京の真の姿である。

おわりに

「改革開放」、「社会主義市場経済」といった中国独自の政治路線が生み出した、「生きた」、「動く」景観

は北京の現実を見事に見せてくれる。市街地の拡大、公害問題、出稼ぎなど、今変化の渦中にある北京を眺めると、まるで高度経済成長期の日本をカラー映像で見ているような気持ちにさえなる。改革開放政策による社会主義市場経済の導入は中国の人々の生活を豊かにし、先進諸国のレベルにまでその水準を引き上げようとしている。しかし、あくまで改革開放政策は社会主義にのっとったものであり、資本主義とは異なる。現象として、目の前に広がる北京の景観はかつての日本を彷彿とさせるものであるが、その背後にある社会主義市場経済の根本は「経済は開放するが土地と基幹産業部門は守る」⁽⁵⁾とする中国独自の社会主義路線にある。したがって、今後の中国政府の政策転換や国民あるいは地域間の経済格差の状況によっては、さらなる変化と新たな現象を生み出す可能性もある。中国国民がその中で、どのような生活と思考を生み出し、国土を形作っていくのか、今後の重要な研究対象であり、大きな課題といえよう。

謝 辞

本報告は2004年度神奈川大学21世紀COEプログラム若手研究者海外派遣事業における調査に基づくものである。受け入れ研究機関である北京師範大学民俗学与文化人類学研究所の劉鉄梁先生、チューターを引き受けて下さった北京師範大学文学院民俗学与文化人類学研究所博士課程在籍の韓同春氏および西村真志葉氏をはじめとする同大学のスタッフの方々、通訳をして下さった同大学漢語学院言語研修生大野道子氏、調査に際し、有益なご助言を賜った北京市社会科学の尹鈞科先生と門頭溝区博物館副館長齋鴻浩先生、強行軍の移動にもかかわらず現地への案内をお引き受け下さった趙軍氏、調査に快くご協力下さったフィールドの住民の皆様、また、このような機会を与えてくださった福田アジオ先生をはじめとする神奈川大学21世紀COEプログラムの諸先生方、同事務局の皆様方に心より感謝申し上げます。

注

- (1) 北京市統計局編 (2004)。
- (2) 北京城の歴史については、候 (1988) に詳しい。
- (3) 門頭溝区を含めた北京市の農山村については、尹 (2000) を参照のこと。
- (4) 前掲 (1)。
- (5) 安達 (2000)。

参考文献

- 安達生恒
2000『中国農村・激動の50年を探る 一農学徒の現地報告』
東京：農林統計協会。
- 北京市統計局編
2004『北京統計年鑑2004』北京：中国統計出版社。
中国地図出版社地図開発室編
2005『北京市実用地図冊』北京：中国地図出版社。
- 藤永 豪
1995『北京市中心部における都市的基盤の形成過程』平成
7年度筑波大学第二学群比較文化学類卒業論文 (未発表)。
候仁之主編
1988『北京歴史地図集』北京：北京出版社。
- 岩井一郎
1992「北京の町並みと修復型再開発」『都市計画』172：
97-98。
- 竹内実
1992『北京』東京：文藝春秋社。
- 上野和彦編
1993『現代中国の郷鎮企業』東京：大明堂。
- 王鵬飛・付華
2004「北京市農村における民俗観光の持続的発展について
—門頭溝区川底下村を例に—」『日本地理学会発表要旨集』
66：169。
- 鄒翊光主編
1988『北京市経済地理』北京：新華出版社。
- 山崎健
1988「北京市の都市構造と都市問題」『佐賀大学教育学部
論文集』35 (2)：37-59。
- 楊吾揚
1993「北京商業中心的轉移与展望」北京大學城市与環境学
系編『城市、区域与環境』pp.22-25, 北京：海洋出版社。
- 葉華
2005 「2008年北京五輪と2010年上海万博の都市計画的効果」『都市計画』254：35-38。
- 尹鈞科
2000 『北京郊区村落發展史』北京：北京大學出版社。
[2005年12月9日受理, 12月26日審査終了]